

いいだ人形劇フェスタ 2023 自主企画

## シンポジウム「人形劇による ひとづくり・まちづくり」 報告書

2024年3月31日

NPO 法人いいだ人形劇センター

## 目 次

シンポジウム「人形劇による ひとづくり・まちづくり」概要	1
I. シンポジウムの記録	1
II. シンポジウムを終えて ～見えてきたいいだ人形劇センターの課題～	19
参考文献	21

## シンポジウム「人形劇による ひとづくり・まちづくり」

開催日：2023年8月4日(金)18:00～19:30

場所：丘の上結スクエア大会議室3

企画：NPO 法人いいだ人形劇センター

### パネリスト

- ・ 石原 敏子 (秋田県:大潟村人形劇同好会八郎)
- ・ 佐藤 澄子 (千葉県:船橋地区人形劇連絡会)
- ・ 秦 香代子 (長野県:東野人形劇あかね)
- ・ 廣田 美那子(大阪府:枚方人形劇連絡会)

### 進行

- ・ 松崎 行代 (京都女子大学教授・いいだ人形劇センター理事)

### 主旨

長年人形劇活動に取り組んできた各地のアマチュア人形劇団・連絡会の活動を事例に、人形劇が「活動に取り組むひと」や「活動を展開するまち」に生み出したものを明らかにする。

そして、シンポジウムを通して、飯田市がこの先「人形劇のまち」としてどう進んでいったらいいのか、特に、創立10年を迎えたいいいだ人形劇センターが、「人形劇のまちづくり」をどう考え、市民に何をすべきかを考えるヒントを得る場としたい。

## I. シンポジウム記録

### 開会の言葉

**松崎：**ではこれより、シンポジウム「人形劇によるひとづくり・まちづくり～各地のアマチュア劇団の活動から～」を始めたいと思います。このシンポジウムは、NPO 法人いいだ人形劇センターの自主企画として開催させていただき運びとなりました。私は、京都女子大学の松崎行代と申します。人形劇センターの理事でもあります。よろしく願いいたします。

いいだ人形劇フェスタは、1979年に人形劇カーニバル飯田として誕生し、今年で45年を迎えました。飯田市はこの人形劇の祭典が、誕生から10年を迎えたころ、市民に広く浸透した様子を見て、「人形劇のまち」として、文化政策によるまちづくりに本格的に取り組み始めました。人形劇カーニバルは、国内最大の人形劇の祭典として、国内はもとより海外の人形劇関係者からも注目されるようになり、市民にとっても飯田の夏の風物詩としてなくてはならないものとなりました。

そして、カーニバル20周年のときに、市長から終了宣言が出された際も、有志の市民が動き、「無くしてはならない」と、新しい運営体制によるいいだ人形劇フェスタに生まれ変わったわけです。

その後、フェスタは大きくなっていきましたが、30周年を過ぎた2010年頃になると、『人形劇のまち』ではなくて『人形劇フェスタのまち』ではないか？』という声が聞かれ始め、フェスタ以外の360日も人形劇を楽しむ市民が生き生きと過ごすまちづくりを目指そうという動きが起り、2012年12月に、NPO 法人いいだ人形劇センターが設立し、2013年より、本格的に活動が始まりました。こうして生まれたいいだ人形劇センターは、一年を通した人形劇のまちを目指し、市民へのさまざまなサービス提供と、人形劇文化の向上を目指し、昨年度10周年を迎えました。

しかし、この先目指す人形劇のまちについて、その青写真は明瞭さに欠けているように思われます。センターが10年間行ってきた人形劇のまちづくりの成果も、コロナもあり、十分には評価できていません。

フェスタのまちではなく、人形劇のまちとは。そこではどんなふうにも人形劇を楽しむ人がいるのか。そんな人たちがいることで、そのまちに何が生まれているのか。

井の中の蛙大海を知らず、ではなく、日本各地で人形劇の活動に長年取り組んできた方々の姿から、人形劇がどんなひとつづくり・まちづくりをもたらすのかをあらためて考え、そして、飯田市は今後、どんな人形劇のまちづくりを目指すのか具体的に考える必要があると思います。そして、そのために、人形劇センターは何をすべきなのかを考えるヒントを得たいと思い、センター主催事業として、このシンポジウムを開催しました。

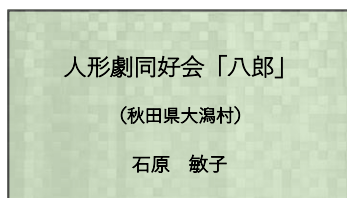
本日は、秋田、千葉、大阪、そして飯田から、長年人形劇活動に取り組んでこられた劇団や連絡会の代表の方にパネリストとして参加していただきました。また、フロアーにも、飯田で人形劇に取り組む方、センター関係者にもご参加いただいています。参加をお願いしていた行政の方は、ご都合で参加できないとのことですが、フロアーのみな様からも具体的なご意見をいただきながら、一緒に考えられたらと思います。よろしくお願いいたします。

## 各地の人形劇活動の発表

### 〈大潟村 人形劇同好会「八郎」〉

松崎：では、早速、パネリストの方にお話ししていただきたいと思います。北の方から順番にと考えました。

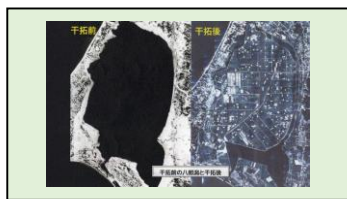
まず初めに、秋田の大潟村からお越しいただいた、人形劇同好会「八郎」の石原敏子さんです。お願いします。



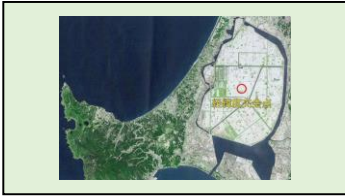
石原：秋田県大潟村からやってきました、人形劇同好会「八郎」の石原敏子と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。発表させていただきます。



私の住んでいる大潟村です。男鹿半島の付け根、ちょうど、矢印の位置ですね。あそこが、私の住んでいるところです。



ここは、八郎潟という琵琶湖に次ぐ大きな湖でした。戦後、食料増産のために、国が干拓してできた村です。左が干拓前、右が干拓後です。この工事は、20年かかったんですよ。



これが現在の大潟村です。湖の 8 割が農地になりました。周りは、52 キロの堤防で囲まれています。海面よりも低い位置に村はあります。2つのポンプ場が、いつも必死になって水を掻き出しています。

大潟村は、人口約 3000 人です。モデル農村として政府が募集しましたから、全国から 5 回に分けて入植者が集まりました。誕生してからまだ 60 年に満たない若い村です。

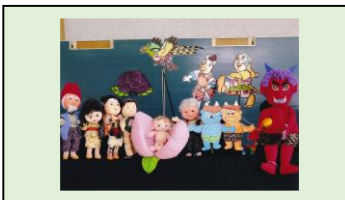


これが、大潟村の光景です。八郎潟は、西洋皿のような浅い湖でした。水深が 4 メートルから 5 メートルだったので、干拓が随分しやすかったんですね。最初は、琵琶湖という案も出たそうですが、琵琶湖はすり鉢型、八郎潟は西洋皿のように水深が浅かったので、ここが選ばれたんですよ。オランダの干拓の技術を取り入れてできた村です。



これがメンバーです。私たちの会の特徴は、全員が農業者です。全国各地から、夫とともにここにやってきました。秋田県内はもちろん、東京、北海道、滋賀、そして私は長野県上田市旧真田町の出身です。53 年前、夫は 24 歳、私は若干 24 歳。希望に燃えて、秋田の地にやって来たということですね。

この人形劇同好会「八郎」が結成して、47 年になります。新しい若い 2 人を除いて、ずっと同じメンバーでやっています。



『桃太郎』の人形たちです。

人形劇団を結成した理由は、全国から集まってきて知り合いが少ない、友達が欲しかった、自分を出す場が欲しかった、家庭では意見が言えなかった、などが挙げられます。



『ジャックと豆の木』の人形劇の時のものです。発表の場は、村のこども園と福祉センターで、村民を対象に 2 回だけ

公演を行っています。もっと若いころは、近郊の施設に行ったんですが、だんだん歳をとってきたので。それと、農業がきびしくなって働かないといけなくなったので、今のところは年に2回だけなんです。

しかも、私たちの活動期間は、農閑期間の11月から3月までの5か月間だけです。春から秋まで私たちは農業を頑張る、それが一息ついて11月になるとみんな集まります。ですから、ここにおられる方たちが、通年活動を続ける環境にあることを、私は、とてもうらやましく思っています。



これが、『八郎太郎物語』です。東北には、十和田湖、田沢湖そして、私たちが住んでいる八郎潟の3つの湖があり、ここにまつわる壮大な伝説があります。龍になった若者の物語なんですけれども、これを私たちのライフワークとして、村の人に伝えるべく活動に取り組んでいます。その時のものです。毎年やっているわけではないんですよ。周年の記念の時に、私たちの記念にとやってやっています。



同じ『八郎太郎物語』ですが、毎回少しずつ変化していきまして。このときは、影絵で湖の中を表現しています。



これは、龍と坊さんの戦いの場面ですね。後ろで私たちが鎌を持っているのは、農民が「大変だ、大変だ」って騒いでいる。そんなことを影絵で表現しています。



これが、『八郎太郎』の最後の時の場面です。

私たちの会の特徴は、人形劇の専門家のリーダーがいません、そして、私たちの住む秋田県にはプロの人形劇団がありません。そして私たちは、52キロの堤防の中だけで生活しているものですから、まさに松崎先生がおっしゃった井の中の蛙ですね。ですから私たちは、自分たちで意見を出し合い、ディスカッションをして、作品をつくり上げています。

そして、全員が農家の主婦です。農家の主婦というのは、約10ヘクタール田んぼをつくりますから、5千枚の稲(の苗)をつくります。その時の稲は、私たち主婦に任されています。その時の判断で、出来不出来が一瞬で決まってしまう。気を遣いますね。4月から1か月間、田植えまでの間、自分の判断で植物を育てていますから、みんな、自分の意

見をきちんと持っています。すごい強情です、私も含めて。堂々と意見を言います。

専門家がいなくて、そして、特別なリーダーがいなくて、自分の意見をね、私はこう思う、私はこう思うというのをね、ディスカッションします。先ほどの事前の打ち合わせで3人の方たちも、共通しているものがありましたね。互いにディスカッションして。傍で見ているとけんかしているみたいで恐ろしい会だって言いますが、だれもやめる人がいなくて、また集まると仲良くやっている。不思議な会だって言われていますね。後から入った2人の方たちは、よくあんな恐ろしい会に入ったねって言われていますけど、その2人の方たちも、ちゃんと意見を言って、楽しんでやっています。

私たちは自己主張しますけれども、でも、私たちの会のいいところは、決まった後は、ちゃんとそれに従うこと。ちゃんと協力して一つの作品をつくりあげます。そこが私たちの会のいいところです。

一つのことを最後まで意見を言いながら練り上げてつくり上げたという充実感があるから、47年間続けて今までやってこれたんだなって思っています。

そして、私たちの会の課題です。現在、10人いますけれども、新しいメンバーが来ないんですよ。努力しているんですよ。こども園に行って、協力してよとか言って。でも、なかなか、出来上がった会には入りにくいんですよ。

そこで私たちは、人形劇の楽しさを伝えるために、自分たちで新しい会を結成したら、そこにお手伝いをしたい、そんなことを考えているんですけど、なかなかねえ、実行できていませんねえ。

最後に。メンバーに聞いてきました。今日のパネルディスカッションで発表するにあたって、「みんなの意見は？」って言いましたら、「死ぬまでやりたい」って言ってました。高齢化が進んでいるんですよ。でも、死ぬまでやりたいねって。

私にとってこの会は、新しい土地に根を張り生きていくための拠点でありました。ここで培ったものが、その後のさまざまな活動に発展していきました。これは、私だけではありません。仲間のなかからは、女性で初めての村長が生まれました。そして、小学校の教育のお手伝いの仕事をする人も出ました。それから、農協の役員もやったりしています。農作業しながら、人形劇からこんなふうに社会活動に発展していったということは、今考えると、人形劇は私にとって、あの村で生きていくためのなくてはならない拠点だったと思います。

お後が続きます。以上です。

**松崎:** 何もなかったところに村ができ、そこで誕生した人形劇同好会「八郎」の活動についてでした。

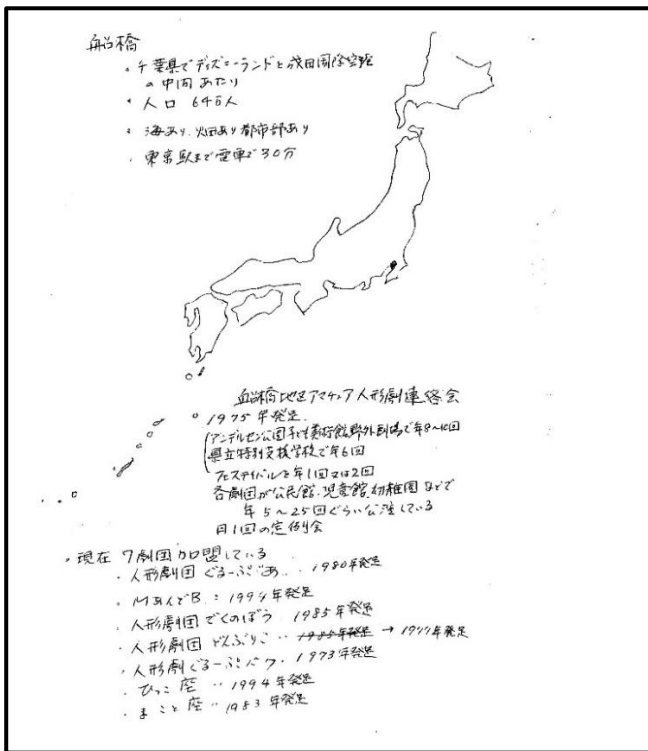
### 〈船橋地区人形劇連絡会〉

**松崎:** では、続きまして、船橋地区人形劇連絡会の佐藤さんです。

**佐藤:** 北の次ですね。私は、千葉県の船橋市からやって参りました。千葉県のわからない方もいらっしゃるかと思います、印刷物をつくりました。船橋市は、千葉県の、ディズニーランドと成田国際空港のちょうど真ん中のあたりにあるところです。人口は、なんと64万という大きな市なんです。

今日は、連絡会に入っている「人形劇団 グループ“あ”」の方もいらしています。私のわからないところ、教えてくださいね。(フロアーのグループ“あ”の方に)

連絡会というのは、先ほど(パネリストの)打ち合わせの時に、「連絡会というのはどういうものなんですか」というご質問があったんですが。今は、加盟している劇団が7劇団です。月に一度話し合いを持っています。(上演などの活動を)一緒にやるんじゃないんです。各劇団、みんなそれぞれ自分の好きなことをやって、いろんな幼稚園とか保育園とか好きなどころで人形劇をやります。連絡会として一緒にするのは、この資料にもありますように、アンデルセン公園の上演とか、県立特別支援学校の上演とか、あと、フェスティバルが年に1回くらいあるんですけど、それをみんなでやるっただけです。各劇団、設立した年月日も違いますし、思いも違いますし、やっている人たちもみんな違うんです。だから、作品もいろいろありまして、それは面白いんです。こんなふうに、統一したものがないところで連絡会はやっています。



ただ、人形劇は広いところを必要とするんですね、練習するのに。ですので、練習するところは公民館になっています。公民館は、私たち(連絡会)は、(団体登録によって)ふつうに借りる人たちの半額で借りられるものですから、それを利用していただいています。私たちはアマチュアですとやっていますので、お金がなく、自分たちの練習場所なんて持てないんですね。ですから、みんな練習場所で苦労していることは、確かです。

今日、私は一番先に言わなくちゃと思ったのは、飯田がずっと人形劇をメインにしてくださいるのは、人形劇人として本当にうれしいんです。ほんとに。私たちも、船橋がそういうまちになってほしいなという思いで、船橋ですと続けているんです。

私たちの住んでいるところは都会化されているものですから、思い出に残る樹があるわけでもない。そしたら、せめて船橋の子どもたちに、いい思い出を持ってもらいたいという思いで、人形劇を続けております。

今、いろいろなIT機器がありますよね、紙文化が無くなって。そういうのを昔に戻せとは言わないですよ。自分が勤めていた時、隣に、日本で初めてのコンピューター室があったんです、30 畳くらいの部屋なんですね。それが何と今、こんなに小さくなっているんですね。それを元に戻してほしいとは思わないけれども。でも、やっぱり、今、子どもたちのなかに無くなっている友達との会話とか、そういうものを残すのに、一番いいのは人形劇じゃないかと思っているんです。なにせ、人形劇というのは、音楽も美術も含まれていて、お互いキャッチボールが無いと台詞も成り立たない。こんなにいい芸術は、無いと思うんです。

それを、できたら飯田の方たちには、特に教育のなかに取り入れてくださったら嬉しいと思います。どの方が飯田の方かわからないんですけど。飯田の人形劇が子どもたちの文化としてまちに定着していることで、子どもたちは小さい時からこういう文化に接して、大きくなってそれを誇りとするようになるんじゃないかと思います。私たちはそんな思いで船橋ですと人形劇を続けているので、飯田の方もがんばってほしいというのが、私の思いです。以上です。

**松崎:** 飯田は、かつては小学校・中学校、すべての学校で人形劇のクラブ活動が行われていましたが、今は、小学校は1つだけ、中学校も4つかな、少なくなっています。子どもの数が少なくなると、クラブが精査されてしまったということもあるのですが。ですから、飯田市も人形劇のまちとしていい方向に進んでいるのかという点は、疑問を感じることも



あります。

佐藤: それは、すごくもったいないような気がするんです。私たちは、50年近く進めているんですが、船橋ではそこまですべていっていないので。飯田はこれほど人形劇が(市民に)密着しているのに、教育界の中に入れないのはどうしてなのかと思います。

松崎: 船橋の連絡会の皆さんは、特別支援学校に年に5・6回行っていらっしゃるんですね。

佐藤: どうぞ(フロアーの船橋人形劇連絡会の方に、発言を促す)


フロアーより船場地地区人形劇連絡会 Aさん: 7団体が順番に。

松崎: 教育の場で子どもたちが人形劇を楽しんでほしいということで、一つの学校を拠点にやっていたらいいですね。

佐藤: そうです。

### 〈東野人形劇あかね〉

松崎: ありがとうございます。では次に、地元飯田市の東野人形劇あかねの秦さんをお願いします。

<p>東野人形劇あかね</p> <p>(長野県飯田市)</p> <p>秦 香代子</p>	<p><b>東野人形劇あかねの誕生</b></p> <p>1992 (H4) 年</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・飯田市が、人形劇のまちづくりの一環として、公民館を中心とした市民の人形劇活動を支援</li><li>・東野公民館でも、人形劇の活動に取り組んだ。</li><li>・東野公民館文化委員(秦)を中心に、他の公民館委員・友達・地域の知人らを勧誘</li></ul> <p>1993年 (H5)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・東野人形劇あかねとして活動開始</li><li>・メンバーは、全員が仕事をもつ主婦。</li></ul>  <p>劇団名の由来になった、カーニバルの参加証ワッペンに採用されたデザイン「あかねちゃん」</p>
--	--

秦: 東野人形劇あかねの秦です。よろしくお願いいたします。

私たちは、市内の東野公民館を拠点に1992年に創立しました。その背景には、この年・平成4年度に、飯田市が、人形劇のまちづくりの一環として、公民館を中心とした人形劇活動の広がりをねらった人形劇活動への助成金の予算化がありました。当時私は、公民館の文化委員をしていて、毎年カーニバルのときは、劇団の受け入れや受付や裏方の担当をしていたので、いつかはまた表に立って演じたいと思うようになり、人形劇団を立ち上げました。かつて、飯田子ども劇場の会員活動として人形劇に取り組んだ経験があることや、子どもにかかわった活動をしていたので、立ち上げには積極的に動きました。

メンバーは、文化委員以外では、公民館の役員とか友達、また、地域の知り合いなどに参加を募りました。途中から市の職員さんの協力もあって、東野公民館の人形劇がスタートしました。

活動開始の翌年、当時の公民館主事の娘さんが応募したデザインがカーニバルの参加証ワッペンに採用され、それを記念して名前をいただき、「東野人形劇あかね」と命名しました。

メンバーについてですが、劇団創立時は、正社員やパートの違いはあっても、メンバー全員が仕事を持っていました。かつ、家庭では主婦として主になって家事を行うなかでの人形劇活動への参加は、大変ではありました。自分たちの子どもは、子育てが一段落して中学生・高校生になっていました。私たちは、自分たちの子どもに人形劇を観せたいという思いが動機になって活動を始めたわけではありませんでしたが、公民館で、地域の子どものとの出会いを楽しみに、人形劇に取り組みました。



これは、初めてカーニバルに出たときの写真です。



これは、文化委員で、シルクホテルにてカーニバルの受付をしたときのものです。

**活動内容**

**人形劇の上演活動**

- ・いいだ人形劇フェスタでの上演が毎年の目標！
- ・保育園や老人施設での上演
- ・県内の人形劇のイベントに参加
- ・いいだ人形センター主催の人形劇定期公演
- ・いいだ人形劇まつりごっこ劇場実行委員

**子どもに関するイベントへの協力**

東野地区のイベント

- ・フェスタを盛り上げる取り組み
- ・子ども寺子屋（春休み・夏休み）
- ・桜並木イルミネーション点灯式
- ・人形劇のまち飯田PRイベント


活動内容としては、私たちの活動は主に、人形劇の上演活動と地区や市の子どもたちの活動のイベントへの協力をしています。

では、もう少し詳しく、各活動について紹介します。まず、人形劇の上演活動についてです。

**いいだ人形劇フェスタ  
上演参加**

劇団創立以来、毎年参加

2018年  
三穂地区公演会場の様子




人形劇の上演活動においては、まずは、いいだ人形劇フェスタでの上演を目標にしています。それにあわせ、保育園、地区のお年寄りの集まりでの上演、その他、以前には、県内の人形劇のイベントにも参加したことがあります。

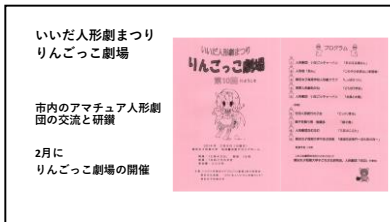
この写真は、三穂地区のフェスタ地区公演の時の様子です。この時は他県の大学生とのジョイントで、交流会もあり、お料理をいただきながら大学生と人形劇についていろいろお話をしました。

**いいだ人形劇センター  
人形劇定期公演での  
公演**

毎月開催  
センターからの依頼を受けて上演



また、飯田市では、いいだ人形劇センター主催の定期公演が毎月開催されています。私たちも、センターからの依頼を受けて上演します。上演の前には、講師から指導を受けることができ、大変勉強になります。これは、定期公演のチラシです。



そして、いいだ人形劇まつりりんごっこ劇場という公演もあります。これは、2005年に始まりました。市内のアマチュア劇団の交流と研鑽を目的に、毎年2月に開催しているものです。市内のアマチュア劇団が実行委員会を組織して行っていますが、私たちも第1回から実行委員としてかかわり、企画・運営・上演を行っています。

これは、そのりんごっこ劇場実行委員会の活動の一環として開催した研修会です。むすび座の永草先生に講師を依頼して、私たちあかねが公開稽古をした時の様子です。

次に、子どもに関するイベントへの協力についてです。



東野公民館では、人形劇フェスタが近づいてきたころ、「みんなでフェスタを盛り上げよう」という取り組みをしています。この活動に、あかねは毎年協力しています。

2016年には、「手作りペープサートを楽しもう」というテーマで、ペープサートを作り演じてみることによって人形劇の楽しさを子どもたちに知ってもらった活動をしました。その時、市内の高校生にもかかわってもらったことで、この活動は、若い人を巻き込んだ地域おこしにつながってとても良かったと思います。

これは、ペープサートができたのを、子どもたちが好きなように動かして演じているところですね。



2017年には、公民館には高齢者学級・乳幼児学級などの教室があるのですが、そうした教室との連携で、フェスタの前の時期の各教室の活動として、みなさんと灯籠をつくって飾りました。

こちらは、みんなで相談して絵などを描いているところと、出来上がった灯籠です。下の左の写真は、作る前に、私たちの人形劇の上演をさせていただきました。最後に、できた灯籠をみんなで見せ合いました。



また、夏休みになると、東野公民館では、「夏休み寺子屋」というのがあって、私たちは人形の指導を依頼されて、子どもたちと一緒に人形劇をつくります。以前は、『3匹のこぶた』の人形を軍手で作ったんですけど、この時はダンボールを使って人形を作ってみました。

この写真は、みんなでできた人形を見せ合っているところです。なかなか難しかったのですが、みんなで協力して出来上がりました。



こちらは、飯田市の人形劇をPRする活動への参加です。市内5か所に特設会場が設置され、あかねはJR飯田駅の飯田観光案内所の展示スペースを利用して、手づくり人形を飾らせていただきました。スタンプラリーも合わせて開催して、5か所のスタンプを集めると、抽選で人形劇にちなんだグッズがもらえるということで、みんな5か所を廻ってスタンプを集めているようでした。



こちらは、毎年12月に、私たちの地区、東野地区にある桜並木にイルミネーションを飾るイベントへの協力です。イルミネーションの点灯式の時には子どもたちも集まってきます。私たちは人形劇は行いませんが、チランを配ったり、サンタの格好をして雰囲気盛り上げるなどのお手伝いをさせていただいています。かれこれ10年近く続いています。

こんな感じで、私たちは人形劇の公演や、地区を中心としたまちの活動に取り組んでいます。こうした活動にあたっては、ひと月に2度集まって練習をしながら活動に取り組んでいます。

でも、みんな、だんだん年齢を重ね、体もだんだんえらくなってきて、世代交代も考えていますが、なかなか思うようにはいきません。以上です。

**松崎:** 秦さんのお話にもありましたが、あかねの活動は、公民館の活動として始まり、わが子に観せるというよりも公民館の活動として地区の子どもたちに喜んでほしいというところから始まりました。そして、今年、32年目を迎えられるました。ありがとうございました。

### 〈枚方人形劇連絡会〉

**松崎:** では、次に、枚方人形劇連絡会の廣田さん、お願いします。

**廣田:** 大阪の枚方から参りました廣田といいます。枚方というのは、数日前のニュースで日本一暑いというのでニュースに出てから、「まいかた」ではなく「ひらかた」というのは随分わかっていただけたようです。そのあと、外に出ちゃダメよとか、メールや電話がかかってくる。

枚方は、京都と一番近いところの大阪なんですね。プロの劇団が、京都には今回の(フェスタの)オープニングでやった京芸がありますし、大阪にはクラルテと、2つ大きな劇団があって、比較的両方に近いんですね。ですから、そういう意味で、人形劇に割と近いところに住んでいます。ですが、私個人としては、人形劇に興味があったわけではなくて、芝居は好きだったんですけど、人形劇はほぼ観たことが無かったんですね。

子育てをしていて、おっぱいをやりながら、おっぱい吸われてこの子たちが大きくなって出て行ったら、私は、もう、カスになるんじゃないかと思っているときに、枚方で、「初級人形劇づくり講習会」というのをやるということになって。ただで

教えてもらえるわけですし、人形劇っていえば劇だから、劇は好きです。己が姿ではなく、人形ならお姫様でもなんでもできるかなということを受けにいったんです。

私はそんな感じで、嫌ならやめればいいやと思っていたんですけども。それ前に、家庭教育学級とかでやっていたグループの人が、市民講座にしらって市に掛け合ってくれてやっと市民講座になったようなんですね。それがちょうど、クラルテが人形劇を広げるためには、お母さんたちが人形劇をやれば子どもを連れて来るからすそ野が広がるだろうということで、人形劇の講習会をしようと言った時と、枚方で市民講座の動きが始まったのがちょうど合致したらしくて。

私が1期生なんですけど、クラルテのオールスターキャストの先生だったわけですよ。各分野に分かれて教えていただいて。でも、そんなことしていたら劇団も採算が合わないもんですから、2年目からは1人しか来なくなりました。クラルテだったり、何年かしたら京芸なんかに移ったりしました。

1回目が終わったときに劇団が4団体位残った。それで、社会教育の人が、「連絡会を作れ、連絡会を作ってなにかやって行った方がいいだろう」と。それで、何だかわからないけれど、それじゃ連絡会を作ろうってということで、1976年に連絡会を作って。サジェスチョンを受けながら、講習会をやったらどうかと言われて、色々やりました。新しい人を集めて。

講座で、「やりたいことをやったらどうか」と言われて、そこに連絡会の劇団の代表者の人が4人いて、(その4人に対して)社会教育の人が、「この4人がやりたいということをやれば最低4人は集まるんだからそれをやれ」と言い、「そうだね」といって。それで、合宿をしようということで、1回目をやったんです。そしたら途中で、「市のお金を3万使うということは、やっぱり30人は来ないといけない」とか言われて、「くそー」って思って、電話かけまくって、30人超える人をどうにか集めて。旦那からは、「公費を3万とって喜んでくれるけれども、電話代は誰が出すねん」と言われて。そんなこともありながらやりました。

その時に人形劇をやった社会教育の人が、「コーラス団体なんかいろいろあるけど、人形劇の講座を受けた人は、おばさんなんだけど、固まりじゃなくて、一人ずつ粒で見える」って言って。評価してもらったんでしょうね。それぞれが粒だっただけに見えるって。私たちも喜んで、すごくうれしかったんです。そんな感じで、講座はずーっと続けてもらいました。

そして、プロが最初の何年かは講師で来ていたんですけども、予算的なこともあったり、人形劇のプロをつくるんじゃないかって、みんなで何かひとつのことをやろうってということなんで、市民同士の教え合いでいいんじゃないかということで、連絡会のメンバーの中でその講座の講師を何年かやったんですね。そうしたら、素人ですから、みんなそれぞれ言うことがバラバラなんです。伝統のものではない現代のものは、何をやってもいいものだからバラバラでいいんですけれど。習いに来た人は、何人かいる講師に聞いたらみんなバラバラのこと言われるとわからなくなって、苦情がいっぱい出たらしいんです。結局、一人で受け持ってくれないかということで。そしたら何人かいた人たちが、ずっと責任持つのは嫌ということで、私がその後何年か受け持った。その間にグループがいくつもできて。私も楽しかったですし、グループもみんな楽しくて。それで、中級講座とったり初級講座とかいたり、講師をよんでいろいろなことをやりました。

やっていくなかで、私もどんどん外に出て行ったりして。飯田も来て、もうびっくりして、こんなことを枚方でやりたいと思って。それで、1988年ですかね、連絡会のみんな、そこに(フロアーに)山下さんいるんですけど、連絡会のみんな誘って、何人かで飯田に来たんです。飯田のIC下りたところから案内があって、着いたら、おいなんよサロンにお漬物があったり梅干しがあったり、おもてなしがすごい。トイレに行ったら、和式のトイレの使い方もきちんと絵に描いてあるし、もう、「すごーい」と思って。「こんなのやりたい」って言って、みんなで盛り上がり帰って、やろうってことになったんですね。それを公民館に頼みに行った時の館長が、枚方人形劇フェスティバルが20周年の時に、出しているニュースで書いている文章を、ちょっと読ませていただきます。

「無茶から出たまこと 渡辺義彦

あのな、話があるんやけど。数人の人形劇のメンバーが、館長である私の机のところになじり寄ってきた。隣の席のI君までそのメンバーに加わってる。彼は人形劇団に個人的に参加していた。こいつ、どっちの立場やねんと、内心思いながら、なに？と。枚方で、人形劇フェスティバルやりたいねん。いつ？来年の3月ぐらい。はあ～！？ すごいえば、この連中にI君も加わって、8月に飯田の人形劇フェスティバルに参加したのだった。それで、大いに刺激を受け



たのだろう。しかし、3月と言えば、今年度である。役所の予算計画は年度の単位で立てているので、急に新規事業に取り組むことができるわけがない。人形劇連絡会でやるの？ まあ、そういうかたちやけど。公民館も一緒にやりたい。そりゃそうだ。フェスティバルともなると、全館それに使うこととなる。公民館も主催に加わらなければ、そんな無茶なことは通らない。しかし、もし枚方人形劇フェスティバルと銘打って大々的にやるのなら、公民館でなく教育委員会の名前が必要だろう。今頃言うても、予算無いで。連絡会のお金が10万くらいあるし、それで、なんとかやる。予算は連絡会、教育委員会は主催の名前と会場の確保。それと、職員の協力ということになるのだ。予算無しで決算なら、通るかもしれない。しかし、翌年以降も予算が無いとすれば、済まないだろう。ま、その時はその時か。聞けば、関西のアマチュア劇団に広く呼び掛けるだけではなく、プロの劇団にも来てもらうという。そうなるなら謝礼も必要だろうし、宿泊場所も用意しなければならない。関係者の食事などはどうするんだ。また、駐車場の確保、その他、やることはいっぱいありそうだ。人形劇を公演する各部屋では、舞台音響照明などの設営と転換等、スタッフが張り付く。あんたらそしたら、みんな、裏の方にまわるの？ そらそうやけど、わたしも公演するで。呆れるほど、意欲満々。恐ろしいもの知らずである。こんなふうにしてひらかた人形劇フェスティバルは始まった。こんなふうだったから、続いたのかもしれない。いきあたりばったり、そして、それからが大変だった。連絡会のメンバーも、協力する職員も、訳が分からないうちに本番に突入した。そして、打ち上げの異様な盛り上がり。みんな泣いて笑って叫んでいた。教育長は飛騨の七笑いのお酒を差した。一次会、二次会、三次会、私は意識不明になってしまった。こういうことが、昔の、生涯学習センターではない公民館でおこったのであります。え？ まだやってる？ 呆れる連中だ。」

というのが、20回の時の館長の寄稿文だったんですけど。私自身も、1回目の打ち上げで、人生で初めて、酔っぱらって意識が途切れるという経験をしましたが、もう、本当に嬉しかったんです。でも、やってる人間も楽しいけど、よそから来てくださった人たちが、どれが職員か、どれが人形劇人かわからないっていうくらい、みんながのって楽しくて、そしてそのころは、コンビニもありませんでしたから、朝、着いた劇団の人には、朝ごはんを作って、もう誰にでも。嫌じゃないし、楽しくて、みんな演じましたし、観るのも観たし。

で、そんなふうで、ずっと続いていたんですが、今現在、過去のことになりつつあります。一時期、連絡会の会員は70人位いたかな、それで100くらいの劇団の公演もやりましたし、10いくつのプロが来てるって、あれどうやってたのか、今、思い出せないんですけど。急に来れるようになったから来るって、ギャラを払わなくても来てくれたのかな？って そんなような状態だったんですが。

それが、枚方市としても、市民がそうやって動いてくれるというのは、とても、おいしいわけですよ。だから、1回目の時は自分たちの手弁当で、2回目にパーンて50万円予算が付いたんですよ。それ以降は、あんまりなくて。今のことは、私は途中から中心から引いたので、今、中心の運営委員会には山下さんが入ってくれているので、わかると思うんですけども。

でもやっぱりやっている人間が楽しくないと、観る人は楽しくないと思うんですね。でも、大変、しんどいっていうのも多くなっている。最初、職員の方とのびのびとやっていたんですけども、世代が変わってくると職員も変わってきますし。そうすると、楽しいというよりも、彼や彼女らは、お仕事でやるわけですし、会議もきちんと書類を出さなくちゃいけない。そうすると、こういう私みたいな人間は楽しいよりも面倒くさくなってきちゃうんですね。

それから、今、若い人たちが、連なってみんなでやるっていうことがとても不得意なので、みんなでつるんでやるっていうことは本当に無いし。私たちがやり始めたときは、子育てが終わってから働きに行くところが無かったんですよ。だけど今は、すぐ、また、共働きしないと、生活大変ですし。しかも、私たちの時は、公民館のお部屋はただで貸してくれたんですけど。今は、講座は、初級講座があるんですけど講座が終わったとたんに、次からはお金がいるんですね。ちょっと集まってお話しするだけでも。だから、グループがなかなかできない現状で。それって、あちこち見るとみんなそんな感じなんですけど。

枚方の隣りに、京都府なんですけど八幡市という そこに(フロアーに)八幡氏の人一人来てますけど。ここは11人で連絡会をつくっていて、合同で民話の人形劇をつくっていて、教育委員会がちゃんとサジェスチョンしてくれて。

(八幡市は)今、小学校が8つなんですけど、年に2校、だから4年くらいで廻ってその民話の人形劇を各学校で上演しているんです。一回りして、もう一回りして、それがちゃんと国からの予算をとって。指導は、以前京芸にいた大原めいさんがずっと張り付いて。それも、めいさんにちゃんと講師料払うのも教育委員会から出ているみたいな、もうほんとに羨ましいんです。

もとは、枚方がブイブイ言っていたので、隣の八幡市とか寝屋川市とかあるんですけど、枚方に追いつき追い越せだったんですけど。今、完全に追い越されちゃって。だから、何とか教育委員会に入り込んできたいんですけど、なかなかうまくいかない。とりあえず、そんな現状です。

**松崎:** 枚方の人形劇フェスティバルは、今年度35回目だそうですね。

**廣田:** そうなんです。

#### 4名の発表から

**松崎:** 4名の方にお話を伺いましたが、いいだの人形劇フェスタも、もう少して50年を迎えます。いろいろなことがあったけれども、50年続いている、それはすごいことだなと思うんですよね。大瀧村の八郎は、年に5カ月だけだけれども11月になったらまたみんなが集まる。それで47年続いている。千葉も40年以上。どうしてこんなにそれぞれのところが続いたのかというところから考えてみたいと思うんですが。

まず、やっていてよかったなと思ふこと、先ほどのお話からも伝わってきましたが、もう少し。お芝居が好きだったり、歌や、色々なことをやっていたらしゃる人がいるみたいなんですけど、他のものと人形劇ではどんなことが違うのか、人形劇だったからこそよかった、楽しかった、続けられたということ、一言ずつお話しいただけますか。

#### 〈長年人形劇を続けてきて、人形劇活動の魅力とは〉

**石原:** 私たちは、3月の発表会が終わったら、種まきの準備が始まりますね。それで、大瀧村は、毎日毎日、強い西風が吹くの。風が吹いてハウスが飛ばされたり、それから、稲が風で焼けたり、そんな時、私は、「人形劇の仲間と、冬の間、雪の中に埋もれながらやったあの時間はいかに豊かで、いかにぜいたくな時間だったか。早くがんばって稲刈りが終わって、みんなと一緒にあの時間をまた過ごしたい」と思うんです。

そして、個人では他のクラブなどやったりしていますけれども、人形劇であるような言い合いをして、とことんまでやって。そうすると、他の会に出て行って、私が意見を言ってみると黙っていると、なんか、物足りないね、さみしいんですよ。「いいのかい？」っていう。あれだけ言いたいことを言う仲間が恋しいのですよね。私が脚本担当なんですけど、みんな、もう、いろいろ言って。私が怒るとね、どうもそれをおもしろがる傾向がありますね。私はこの何十年間、あの人たちに認められたい、あの人たちにぎゃふんと言わせたいという一心でやってきましたね。それが、私の、次の個人的な文章の活動に繋がっていくんですけど。ひとつのことをみんなでやったという充実感が、活動を続けさせていたのだと思います。

**松崎:** 石原さんは、文章を読むのも好きで、書くのも好きで、そういう活動もやっています。

**佐藤:** 私は、楽しいからやっているんですよ。ずっと楽しいからやっているんです。この楽しさで、子どもたちに何か残すものがあたらなという思いでやっています。私には3人子どもがいて、3人とも船橋に住んでいるんです。実をいうと、うちの長男がもう50も過ぎているんですけど。その長男が言ったんです、「どうして船橋が住みよいまちを選ばれるだろう?」。そしたら次男が、「そうだよ、おかしいよね。交通渋滞はあるし、美しいまちではないのに、どうして住みやすいまちにならなろう」と。そしたら、何と長男が、「お母さんのような文化を考えている人がいっぱい、楽しく活動しているからだよ」と言ってくれたんです。もう、こんなうれしいことないんです。そのために私たちやっています。すごい褒め言葉なんです、ほんとに。

それと、私、女性の立場だけで言っていますけれども、でも、うちの劇団には男性も入っています。その人は自分の仕事をやりながら人形劇をやっています。だから、もう、背広を着ながら人形劇をやっている。

市の方が、年齢いった人に対して、生涯教育ってやりますよね。そうじゃなくて、人形劇というのを、身近に感じて、小さい時、若い時からできるような環境に、世の中なってくれたらいいなど。そして、自分の仕事以外の楽しみをもってくれたらいいなど、私は思っています。私は、50年間、学生の頃からなんですけど、人形劇が好きで好きでたまらなくて、楽しくやりました。それで楽しくやっていると、それは子どもに伝わるんだなということを実感しております。

**松崎:** 子どものためにというのは、自分の子どもだけではなく、もっとひろがってどの子どもということですよね。

**佐藤:** そうです。自分の子はたった3人しかいませんのでね。孫は6人いますが、それだけではなく、世の中の子どもたちが人形劇を好きになって、くれればいいなど。

**松崎:** 何か、具体的なエピソード、あの時のことが忘れられないというようなことはありますか？

**佐藤:** そんなに、無いです。おかげさまで山形とか沖縄とかそういうところでもやらせていただいているんですけど。「おばちゃん、ぼくたちのためだけに来てくれたの？」って聞くんですよ。ほんと、嬉しいですよ。そのために、私、がんばっています。

**松崎:** では、秦さん、いかがでしょうか。

**秦:** 私たちは人形劇といっても、人形劇をやる時が少ないくらいで、みんなで顔を合わせるのが楽しみで。練習は一応するんだけど、お話に夢中になったり、おいしいものを食べに行っちゃったり。子どもが大きくなればなつたで、進路のことなど悩みとかもあって、先輩のお母さんたちにアドバイスいただいたり。それから、いろんなことがあっても、ここに来てみんなの顔を見てお話しすると、ストレスの解消になって、またこれからも人形劇が頑張ってできるなって言って、そんな感じでやっています。これからも、人形劇は無理でも、みんなで顔を合わせて楽しい時間を送っていきたくと思っています。

**松崎:** そうですね、人形劇って、一人芝居もありますが、仲間で作るもの。そして、仲間で作ったものを誰かが観てくれる。そんないろんな人とのつながりの中でつくられていくというのが充実感を生むのだと思いますね。お茶を飲むけれども、ちょっと、人形劇の練習もするっていう、そんなところもいいんだなと思いますね。

**廣田:** さっきも言ったんですけど、初めは人形劇というよりもお芝居が好きで、一人っ子というのもあったんですけど、仲間がいるということがうれしくて。

人形劇をやっていると、後ろでお母さんたちがぺちゃくちゃしゃべっていて、それを見て、これは親を教育しなくちゃと思って、生協の観賞活動をやっていたんですけども。それもこのあいだ100回公演をしたんです。

そんなふうにして人形劇とか芝居とかやっていると、枚方には文化会館とかないから、文化会館を建てたいと思って、コーラス団体とか親子劇場の人たちと一緒に、文化会館の建設を進める会みたいなものをみんなでつくって活動しました。その運動を進めるうちに、そのなかの親子劇場の人が、市議員に出ることになって、選挙活動をしたりということもありました。

会館を造るためには、活動をしている団体が無くてはと、連絡会の中で合同で劇団を作って上演活動をしたり。それは、飯田の人形劇場でもやって。

枚方のフェスのときに、札幌のやまびこ座の方が来てくださったのが縁で、やまびこ座を見せに行かせていただくことになって、会館を見るんだったら、客席から見んではなくて、舞台から見た方がいいから作品を持ってきなさいよって言われて、みんなで作品をつくって札幌にも行きました。横浜の人形の家でもやりましたし、とらまるでもやりましたし、とにかく、人形劇場がありそうなところはみんなで積み立てをして出かけました。

そんなことをしながら、文化会館がもうすぐできそうな気がして、ひらかた人形劇フェスティバルもそこでやるつもりでいたら、それがどンドン先延ばしになって。結局、去年、おととしかな、待ちくたびれたときに建ちましたけど。自分たちが舞台に乗れないような歳になってしまいました。

大阪は、文楽の発祥の地ですから、大人の人形芝居がみんなわかるはずなのに。人形劇っていうと、たとえばむすび座の「わわしいおんな」(生協の鑑賞会に)呼んだりしたんですけど、人形劇っていうと、会費を払っているのにぐっと参加者が減るんです。余計なことになりますが、ついこの前まで入院していたんですけど、いつなら芝居を観に行けま



すかとお医者さんにきいたら、「こんな八十なんぼのおばあさんだったら、誰かにチケットを譲っておき」って言うんです。それから、人形劇の上演があるという、「ちょっと練習しておけばいいんでしょ」って言われたんですね。ちょっとむっとしたから、「先生が思っているよりはもっとちゃんとしたものなんです」って言ったんです。昔からの友達も、「まだ(人形劇)やってんの」って(人形を手にはめたポーズで、手をひらひらさせて聞いてくる)、幼稚園保育園のものっていう感覚がとても悔しいです。幼稚園保育園のものでいいのかっていう。どうでしょう。

**松崎:** 幼稚園保育園のものでいいのかっていう言葉がありましたけど、でも、子どもに届ける者ものだからこそいいものを心を込めて、自分の考えを込めて子どもたちに届けることが大事だと思うんですよね。

そこに何を込めるか、何を感じてほしいかということが大事だと思うんですけど。子どもに文化・芸術を届ける活動、その喜びというものを、みなさんは感じていらっしゃる。そして、そのために協力し合える仲間がいることが何よりも支えになっている。そんななかでやってこられたのかなと思います。

**松崎:** フロアーの皆さんから、なにか、お聞きになりたいこと、ありますか？

ーなしー

### 〈行政との協力関係について〉

**松崎:** では、もう1つ、みなさんにお聞きしたいのですが、40何年、50年近く続けていく中で、何人かの方からは出たんですが、行政の協力というのが、場所にしても活動資金にしても、また、新しい活動のきっかけを与えてくれたり、その活動を支援してくれたりということで、かかわりがあったと思うんですけども。そのあたりのことはどんなふうにお考えか。協力してもらってありがたかったことと、もっとこういうこともお願いしたいということと、そういうことはありますか。

先ほど、打ち合わせの時に少しお聞きしたところでは、大潟村の「八郎」は、行政からは全く支援を受けていませんということでしたね。

**石原:** 出演料は、こども園からもらう1万円だけ。あとは、自分持ち。けれど、お話を伺っていて、これも行政からの援助なんだろうと思えました。施設ですね。すっぽり雪の中でやりますから、社協、公民館の分館なんですけれど、その広間の会場使用はただ。ストーブ、使い放題。そんなことがあって、3000人の村のなかで、私たちがこれ以上にお金をとったら、大潟村は文化なんか発展しませんよ。冬の間、踊りとかいろんな文化活動、それぞれの同好会でやっていますが、そこでお金をとったら、あの村は全く殺伐とした村になりますね。そういう意味では、補助金は貰っていませんけれども、会場使用料は無料でした。それは、感謝します。

**松崎:** 船橋は、上演会場が欲しいということで、ららポートの中に上演会場を作ってもらったということがあったんですね。

**佐藤:** そうです。公演する場所が欲しいということもあるし、練習する場所が欲しいということもありまして、行政と私たちと町の企業ららポートが一体となって、私たちに人形劇場を提供してくれました。した、です。過去でございます。企業は、そこを他の企業に貸せばそれだけお金が取れるわけですから、今は、やっていないです。

**松崎:** 今は、アンデルセン公園で公演されていますが。

**佐藤:** それは、公立のもんです。それは、市の方からの依頼でやっています。

**松崎:** ちょっと前にインタビューさせていただいた時に、市の考えとちょっとすれ違うところが出て、助成金を貰わなくなったということを伺いましたが。

**佐藤:** 昔、文化に対する助成金というのがあったのであります。あったのですけれども、今は、無いんです。すべてのものに対して無くなりました。その他のもので、申請すれば出ますっていうのは、出すようになったんですけれども。それは、なかなか申請が難しいもんですから。面倒ですよ。役所の方、いらっしゃいますよね。難しいですよ、企画書や申請書。重箱の隅つついたような。文句言われるし、あれは慣れていないとできないですね。

**松崎:** 枚方のフェスティバルの最初の時は、お金は自分たちでつくるからいいと言ってやり始めたということですが。

**廣田:** そうです。最初は連絡会にあったお金と家からいろんなものを持って来てやって、だけど、1 回目であんまり儲かっちゃったんですね。だから、公民館が掃除を済ませたばかりだったんですけど、フェスティバルが終わったら、階段のすみにこんなホコリがたまって。館長が、「何とかならへんか」というから、それじゃ、連絡会で掃除代出しますっていうくらい、いけたんですね。で、2 年目に市からの予算が 50 万付いた。だから、昔は、良かった。

今、行政とうまくいっているのが八幡で、彼女とか(フロアーの方を指す)にお話ししてもらいたい。

もう一人、アマチュアで私と一緒にやっていて、今、人形劇団京芸で制作をやっている、プロの立場に立っている人が来ているので、アマチュアの動きをフェスティバルを含めてどう感じているかを、聞きたいと思うんですが。

**フロアーより人形劇団京芸 山本さん:** 枚方のアマチュア劇団出身です。枚方の人形劇講座を、廣田さんが講師になった講座を受けてアマチュアサークルをつくって。そのサークルのリーダーがいなくなって、廣田さんの劇団に入って。そこで枚方のフェスティバルを 10 年くらいやって、その後、京芸の制作になったというわけで。枚方のフェスティバルで育てられて、今、京芸の制作の仕事をしています。枚方で人形劇を始めて、私たちがみんな夢中になったのは、みんな子育てをされていて、「だれだれのお母さん」としか呼ばれない存在だったのが、人形劇の講座に行くと、自分として呼んでもらえる、ニックネームをつけるという感じで。その 1 週間に 1 回の時間は自分として何かができるという時間、そこが私は魅力で人形劇にはまっていったということで、子どものためにとか、はじめは微塵も考えていなかったと思います。

それで人形劇に関わるようになって、世の中に、全国にいろんなフェスティバルがあって、人形劇をやっている人たちがいるってことを知って。今、制作として仕事をしていますけれども、日本の国だけだと思うんです、こんなにアマチュアの人形劇団が国中にあるっていうのは。しかも、国や行政の支援の無い中で頑張っている。頑張っているというか、楽しんでいる。人形劇がこんなに根付いている国というのは、私にはないんじゃないかなと思って。それがどうしてできているかというのを聞きたいと思って、今日の人形劇のひとづくり・まちづくりというシンポジウムに参加させてもらいました。

**松崎:** 今、山本さんのお話の中で、行政の支えが無い中、こんなにたくさんアマチュア劇団があるとおっしゃっていましたが。行政の支えが無いのか、そのささえ方というのがいかたちで実現されているのか、どうなのかというところが十分にわからないので、具多的にどうなのか。本音としてどうなのでしょう。自分たちがやりたいことをやるために、行政とどうかかわっているか、満足しているか、もっとこうしてほしいと思うことはないかなど。

**フロアーより枚方人形劇連絡会 山下さん:** 行政というのは、なかなか難しい。今、私たちは、生涯学習センターでフェスティバルをやっているんですけど。そういう館がね、行政というより指定管理になって、ちょっと違うものが入っている。枚方の方は、そういう指定管理業者にも、行政の方が結構口出しをするらしいから、いまのところはそうなんですけれども。今話題にしている支援、支援で言葉がどうなのかかわからないけれど。

私たちの方は、サンサン人形劇場っていいまして、年間 10 回、その生涯学習センターで、14 劇団あるんですけど、ジョイント組んだりしながら人形劇の上演をやっているんです。また、いじめ問題なんか協議会というのが、保育園とか幼稚園とかに、人形劇を通じて、いじめを直接扱わなくても、みんなで人形劇を観て楽しくやりましょうということで、10 園ほど紹介してくれて、依頼が来て上演するというようなことも、いまのところ、私たちの劇団に少しずつですけども。まあ言うたら行政の方から依頼いただいているということもありますね。

**松崎:** 行政の方から、学校でやってくれませんかとか、子育て支援の場でやってくれませんかというように、声が掛かってアマチュア劇団が行くことが多いようですが。

それが自分たちの一番やりたい活動なのか。つまり、枚方の人形劇フェスティバルなどは、自分たちの方からこういうことがやりたい、だから行政協力してよというふうに協力を求めていましたが、そういうような思いを持ったものがみなさんの方ではあるのか、ないのか。

**フロアーより八幡人形劇連絡会 B さん:** 京都の八幡にも八幡人形劇連絡会というものがあって、当初からは数が減って、7 劇団から徐々に抜けていく人が出て、今、11 人しか残っていないんですけど。そのなかで毎年、「やわた人形劇まつり」というのをやっていて、それこそ、枚方を見てやっているとすけれども。なかなか行政さんとのやりとりという

のは難しくって。もともとは、3月ごろにやっていたんですけど。子どもたちは夏休みが来やすいということで、夏に開催したことがあるんですね。そうしたら、借りていた生涯学習センターが、他にイベントをやりたいのに全部押さえられるとか  
なわんということで、その時期はどいてくれてと言われて、また3月に戻ってしまいました。それが本当なんですが、建前は、年間行事を組むのが4月から組むので、夏だと開催までの間が短い。3月だとゆっくり組めるから、3月にしてほしいということで、結局3月になって。でも、3月になったら、インフルエンザとか子どもたちの中で流行るといのがあって、子どもたちがなかなか出にくいといのがあって、参加予約がされにくい。

あと、金額的なものなんですけれど、うちは小規模なんで、八幡の劇団と、1劇団か2劇団、他のところから呼んだりもしてやっていたんですけど。コロナでダメになって、今、自分たちの劇団だけでやっています。それでも、30万くらいかかっている。そのうちの10万が行政からの補助金なんです。残りの10万はチケットの売上、あとの10万はオムロンという会社が文化的な事業に補助金を出してくれるんです。それこそ、いろんな書類を作って。実績とかどんな規模でやるのかとか、全部出さないとダメなんですけれども。それでもありがたいことに出していただいているので、そういうのを出してもらってやっているんです。オムロンさんは、「出した限りはそれを使ってやってください、最初に計画を出してもらった通りにできればいいです」っていうことなんですけれども。八幡市の行政さんだと、儲かるってダメなんです。そしたら、補助金を返済しないといけないんです。だから、少しマイナスが出るくらいの計画をしないといけない。でも、そこに、マイナスが出たら出たで、自分たちの持ち出しなんです。そういうのがあって、表向きはうまくいっているように見えても、内情はしんどいところはしんどいんです。

そういうところをね、もしここに行政の方が来られているんでしたら、補助金の出し方というの、子どもたちの文化を支えるという、私たちが儲かるからではなく、子どもたちに文化を届けたいから、そこをやってほしいのに、なんとなく、書類上とか金額的なことだけでされているといところ、行政の方との話し合いの中でうまくいかないところがある。しかし、そこは何とか頑張ってやっているんです。

それ以外には、会場費は、無料にしてもらっているとか、文化協会が管理している元幼稚園が廃園になったところを、いろいろな団体も利用して、そこは無料にしてもらっているので、ありがたいことはありがたいんですけど。

**松崎:** 文化や芸術って形としては残らないけれどお金がかかる。いろいろなことにお金がかかるけれど、十分ではないし、赤字になったらいけないといのが、ボランティア的ですね。

**佐藤:** 文化はこちらから言わない限り、自分たちでほしいって言わない限り、お金はでない。

**フロアより飯田市民館関係者 田中さん:** 公民館の委員をしている田中と申します。人形劇の担い手としての気持ちはよくわかるんですけど、それだけでは進んでいかない気がするんですよ。お金の話が出たときにね。

親と子どもが手をつないで会場に集まってきて、一体感をもって観劇し感動を共有したという経験、これはかけがえのないものだと思うんです。このかけがえのない感動をつくる事が出来る人形劇というものの価値を、みなさんで伝えてほしいと思うんです。

フェスタも、どこのプロ劇団が来るとか、そういうアピールの仕方ではなくて。もちろん、それで参加者が増えるといことはありがたいことですが。プロの劇団も参加する、アマチュアの劇団も参加する、それを、子どもたちが、市民がどれだけ目の色を変えて夢中になって楽しめるか。楽しんでいるよっていうところを、ぜひアピールしていただきたいと思います。ステージ側からだけのアピールではなく、観客側からのアピール、つまり、人形劇が、人形劇フェスタが、いかに子どもに必要なのか、大切なのか、かけがえのない体験なんだといことを伝えることです。それがこのフェスタの大きな柱だと思うんです。

**松崎:** 子どもにとって、親子にとって、人形劇を観る価値を何らかの形で明確化していく、私も研究者の一人なので、それができたらいいなと思いますし、そういうことを研究者と実践者、また、社会教育の面からも、人形劇の価値を見える化していくことが、難しけれど、必要だと思います。

そういうことが明確になると、アマチュア劇団の方たちのやりがいにもなって、若い人たちも関心をもってかかわるようなことになるんじゃないでしょうか。人形劇をつくる喜びを感じられるようになること、そしてそれを観てくれた人たちも楽

しかったね、また来たいねと言う市民が増えること、それが人形劇のまちとして、生き生きした生活を過ごす人が増えていくことになるのではないかなと思います。

**フロアよりいいだ人形劇センター長 高松さん：** いろいろな考え方があるなというふうに伺いました。私は長いこと、飯田の人形劇に関わらせていただいて、10回目から30年くらいずっと人形劇のなかに足をつこんでおりました。

今日、お聞きしていて、「え？」って思うこともありました。

行政と市民の活動というのは別ではない。同じ方向を向いて同じようにやっていくから、市民の中に浸透していったと思います。行政から切られちゃったとか、働いたからその分減らされたとか、そういう考えは根っからおかしいんであって。

今聞いていて思ったのは、人形劇っていったいどんなものなんだろうか、これに一生懸命になることによって、どういう部分がどう育つんだろうか、そういうことをあわせながら取り組んでいかないと、自分たちの活動ということで終わってしまうのではないかな。人形劇は一つの文化の表現方法だと思うので、もっと、人形劇とはなんぞやということ、自分たちの周囲のものを固めながら、そこを追究していかないと。

子どものもの、今、子どものものっていう話がうんと出たんですが、もともと人形劇って子どものものじゃない。もっと文化の中心をいってもいいものだと思うんです。そういうところに気持ちを広げながら、行政と一体となってこういう活動をするのが、市民全体が、新しい発見につながるんだという。そこらへんのところを確認しながら進めていかないと、どこかで消えてしまう。子どもの数が少なくなってしまうと、自然に消えてしまう、そんなふうになるんじゃないかなと思う。人形劇って面白っていう、人間が演じるものではないっていうところを、もっと掘っていただくと、私はもう一歩、進めるんじゃないかなと思います。もっとね、がんばりましょうよ。どこがどうだということではなくて。人形劇って何？紙一枚でもできるよね。人形劇って何だろうって、熱っぽく語ることが大事ではないかなと思います。

**松崎：** センター理事長の高松さんからでした。今のお話を聞くと、いいだ人形劇センターは、例えば、どういう講座をして、どういう考えで、人形劇をどう理解して、そのうえで、人形劇をどうつくっていくかに取り組んでいくべきかということが、一つ見えた気がします。ただ、人形劇作品を作る方法や技能を教えるだけではなくて、人形劇というのはどういうものか、どういう表現活動なのか、ということを伝え考え合えるような講座をする。それを理解して、そのうえで、人形劇に取り組みる人を育てる講座、事業をしていく。今回のシンポで得られたこととして、センターの理事会でお伝えしたいと思いました。きっと、理事長も、理事会で発言してくださると思います。

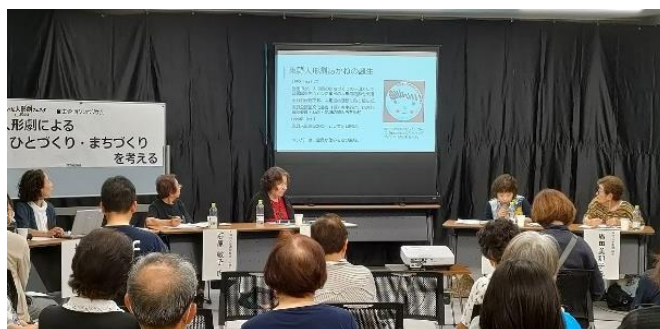
## 閉会の言葉

**松崎：** 時間が長くなってしまいました。今日はみなさんからもう少し声をお聞きしたいと思っておりましたが、進行がうまくいかず、すみませんでした。またこういう機会が持てたらいいなと思います。

飯田には連絡会が無いので、連絡会についても、もう少しお聞きし、あった方がいいのかどうなのかということも、考えたかったのですが、またの機会にしたいと思います。

今日はどうも、ありがとうございました。これでおしまいしたいと思います。ありがとうございました。

(以上)



## II. シンポジウムを終えて ～見えてきたいいいだ人形劇センターの課題～

2022年度のいいだ人形劇フェスタが1週間前にコロナのため中止となり、本シンポジウムは、2年越しで開催が実現しました。パネリストのみなさんには、遠方からの来飯、また、ご多忙のなかの度重なる準備など、あらためて深く感謝いたします。そして、当日、シンポジウムにご参加いただいた50名ほどの方々にも、お礼を申し上げます。

昨年2022年は、NPO法人いいだ人形劇センターの設立10周年の年でした。そこで、センター10年間の成果分析の一端として、「いいだ人形劇センター人形劇講座の成果の検証」(京都女子大学・いいだ人形劇センター調査研究部会 松崎行代, 2023年3月)をまとめました。センターでは、人形劇創造事業として「専門的な人形劇に関する支援の提供」を目的に、初めて人形劇に取り組む市民、また、既存の劇団および経験者の技能向上のための人形劇講座を実施してきました。受講生を対象に行ったアンケート調査では、講座の内容の適切さやセンター職員の対応に対し高い満足度が示されました。そして、講座から多くの劇団や作品が生まれたことで、センター主催の「人形劇定期公演」が安定して開催されるようになり、ひいては市民が人形劇を観劇する場が年間を通して確保されるようになったことは大きな意味があったと評価できました。これは、センター設立の趣旨にあった『フェスタのまち』ではなく、フェスタ以外の360日人形劇が楽しめるまちが実現された一つのかたちと言えます。しかし、それだけでいいのでしょうか。

センターの10年間の俯瞰的に捉えると、根本的な大きな課題が残されたままになっています。それは、センターは人形劇を通してどのようなまちづくりを目指すのか、どのようなひと(市民)を育てたいのか、そして、そのためにセンターは何にどう取り組んでいくのかを長期的な視点で体系的に策定された中長期計画がまとめられていないという問題です。

人形劇という文化・芸術活動に取り組んだ市民のなかに育つものはなにか、それが、市民の生活するまちに何を生み出すのか。藤野和夫は、『基礎自治体の文化政策 まちにアートが必要なわけ』(水曜社, 2020年)のなかで、文化・芸術への取り組みによって、自立的に考え、動き出せる市民が育成されると述べています。そして、文化・芸術は、生活に彩りを与え、人びとが前向きな生活をつくりだす糧になり、それこそが文化・芸術の真の価値だと述べています。

日本各地のまちで、文化・芸術の一つである人形劇に取り組んできた方たちは、人形劇活動取り組むことにどんな価値を見出したのか、単に技術獲得や技能向上だけではなく、ひとづくり、そして、まちづくりにつながるどんな成果をもたらしていたのか。今回シンポジウムでは、4名の方々の30年、40年以上わたる経験をもとにしたお話を伺いました。

秋田の「大潟村人形劇同好会八郎」の石原さんは、「八郎」での人形劇活動は新たな土地に根を張り生きていく拠点だった、そして、仲間とことん話し合っ人形劇に取り組む冬の5カ月間はとてみ贅沢な時間だとおっしゃいました。

千葉の「船橋地区人形劇連絡会」の佐藤さんは、楽しいから人形劇をやっているだけ、その思いが船橋の子どもたちに届き、人形劇を楽しんだことがまち(故郷)と重なる思い出になってほしいと願ひ人形劇に取り組んでいるとのことでした。

飯田の「東野人形劇あかね」の秦さんは、月2回みんなと会って話すことが楽しく、地区公民館の活動、フェスタ、市内のアマチュア劇団との上演会、そして、飯田市の観光に関わる活動と幅広く取り組むなかでさまざまな人との出会いがあることをお話してくださいました。

大阪の「枚方人形劇連絡会」の廣田さんは、社会教育の市の職員のサジェスチョンや協力を得ながら、市民自らが企画運営する講座の実施や行政を動かして「ひらかた人形劇フェスティバル」を生み出し30年以上にわたり継続開催しているパワフルな取り組みの様子を語ってくださいました。

4人のみなさんに共通していたのは、「楽しかった」からずっと続けてきたということです。その楽しさは、一緒に取り組む仲間がいること、その仲間と人形劇やイベントをつくり上げる充実感、子どもたちが自分たちの上演を心待ちにして楽しんでくれた喜びなどさまざまですが、「楽しい」ということが、満足感ややりがいの基盤となり、活動の継続をもたらすのだとあらためて思いました。

これは、人形劇への取り組みが生活に彩りを与え、前向きな生活をつくりだす糧になっている姿といえるもので、上記にあげた斉藤の述べた文化・芸術の真の価値にあたると言えるのではないかと考えます。

シンポジウム後半では、それぞれの劇団や連絡会と行政とのかかわりについてフロアーの方々も含め言及しました。

教育委員会や公民館などを中心とした行政に協力・支援してもらっている内容としては、人形劇の制作や練習のための公共施設の使用、人形劇上演の場の紹介・提供、フェスティバル等のイベント開催にあたっての共催・後援(会場使用、広報、運営の協力など)、指導者への謝礼やイベント開催のための助成金の支出などがあげられました。

それぞれの劇団や連絡会が所在する地域の行政は市民の活動に対して理解を示しさまざまな協力・支援をしてくれており、劇団や団体は行政との良好な関係の中で活動してきたようですが、助成金に関しては申請書作成の困難さや助成金の使途や収支決算においてさまざまな決まりがあることに多少の支障を感じている事案も聞かれました。

これに対し、飯田市の公民館活動に携わる市民の方、そして、いいだ人形劇センター理事長の高松さんから、なぜ人形劇を演じる・観劇することが市民に必要なのかを行政や一般に広く理解してもらうところから取り組み、自分たちの人形劇の活動を固めていくことが必要で、そうした取り組みとあわせて行政と一体となって活動に取り組まなくてはならないのではとのご意見がありました。

高松理事長のこの意見こそ、いいだ人形劇センターが今後取り組むべき課題の 1 つではないかと思いました。冒頭で述べましたが、人形劇センターは設立からの 10 年間に於いて、講習会や定期公演を中心に人形劇を演じる・観劇を楽しむ市民を増やし育てる部分で成果を上げました。しかし、その根底にあるべき「なぜ人形劇なのか、人形劇は市民に何をもたらすか」について検討し、その結果を広く発信して、人形劇の価値を行政や市民に啓発していくことは不十分だったと言えます。そして、この人形劇の啓発は、市民の人形劇活動実践者が自分たちの経験から述べるレベルではなく、人形劇・教育および保育・社会教育・行政・まちづくり等の幅広い専門分野の研究者の研究成果をもとにした知見や、研究者を巻き込んだセンター独自の研究活動によって明らかにすべきことでしょう。高松理事長からこの場で意見をいただけたことは意味が大きいことで、次年度以降、センターの事業計画に反映され大きく動き出すことではないかと思わせてくれました。研究者の一人として、私もセンターの研究活動にさらに前向きに取り組みたいと思った次第です。

最後に。本シンポジウムでは市民によるアマチュア人形劇団が組織となって活動に取り組む「連絡会」について、十分に触れることができませんでした。「枚方人形劇連絡会」は、市が主催した人形劇講座の修了時に、市の社会教育の職員から、講座で誕生した 4 つの人形劇団に対して連絡会結成を促されたことがきっかけだったそうです。連絡会が結成されたことにより、自分たちが学びたいことを学べる講座の企画・運営、そして、飯田を視察し、飯田をモデルとした「ひらかた人形劇フェスティバル」の開催を行政に投げかけ実現させました。

前出の藤野(2020)の著書から、もう 1 点参考にしたい点を挙げます。藤野は、今後、さらに進む人口減少や核家族化といった社会状況の変化に伴い、人と人のつながりが大きく変化する。そうした社会においてこそ、文化・芸術を活かしたコミュニティの活性化がまちづくりとなると述べています。その際、さまざまな団体や組織がそれぞれにネットワークを築き、つながりあい、多種多様な活動を展開していくことが必要だと述べています。

各劇団の「こんなことをやりたい」という個々の小さな声を持ちより「連絡会」で話し合うことで、組織としての大きな声になります。組織であることで、行政や企業や NPO や教育機関など、他の組織・団体との話し合いもしやすくなり、思ってもみない広がりが生まれる可能性がでてきます。

枚方での市の社会教育の職員の一言は、主体的な市民を育てるまさに社会教育的なかかわりだったと言えます。そのような市民の主体性を育て、市民が自立して、人形劇センターや行政とつながり合いながら活動を展開していくようなことが飯田でも出来たらと思います。枚方人形劇連絡会は、そのふさわしい事例ではないでしょうか。

飯田市には、いいだ人形劇センターとあわせて「人形劇のまちづくり運営協議会」が存在します。現在、残念ながらこの会の活動はほぼ休止状態ですが、この会が動き始めることで、飯田市内の各組織・団体が動き出し、「人形劇のまちづくり」を市民と行政と人形劇センターがネットワークを組んで取り組んでいけるのではないかと期待します。これも、セ

ンターが行うべき課題の 1 つだといえます。これまでも理事会の折に何度か話題にあがっていましたが、あらためてその必要性が明らかになったと思います。

十分な深め方が出来ずに、あっという間にシンポジウムが終了してしまいました。

パネリストの方々からお聞かせいただいた貴重なご発表の内容、ご参加の方を交えての情報や意見交換を通して見えてきた人形劇のまちづくりのためにいいだ人形劇センターが果たすべき役割や具合的な取り組みについて、ぜひ、今後の事業計画に反映させてきたいと考えています。

シンポジウムに関わってくださった皆様に、感謝申し上げます。ありがとうございました。

NPO 法人いいだ人形劇センター 調査・研究部会  
京都女子大学発達教育学部 教授 松崎行代

### 参考文献

- ・藤野一夫 + 文化・芸術を活かしたまちづくり研究会 『基礎自治体の文化政策—まちにアートが必要なわけ—』水曜社, 2020 年
- ・松崎行代 「地域の文化活動に取り組む女性たち—アマチュア人形劇団の活動を事例として—」 京都女子大学発達教育学部紀要第 18 号, 2022 年, pp.155—166